

塩森恵子

Shimomori Keiko

おとこのいのち

4人の息子と母の日記



講談社

おとしのこ

4人の息子と母の日記

塩森恵子

塩森恵子

1956 年神奈川県横浜市生まれ。

1974 年高校 3 年の時に集英社「週

刊マーガレット」新人賞佳作に入選。

漫画家としてデビューし、活躍中。

1983 年 3 月結婚。4 人の男児の母。

おとこのこのこ 4 人の息子と母の日記

一九九五年六月二二日 第一刷発行

著者——塩森恵子

しおもりけいこ

© Keiko Shimori 1995, Printed in Japan

発行者——野間佐和子

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二—一二—二一 郵便番号 一一二—〇一
電話

文芸図書第一出版部(〇三)五三九五—三五四

書籍第一販売部(〇三)五三九五—三六二二
書籍製作部(〇三)五三九五—三六一五

印刷所——株式会社精興社

製本所——黒柳製本株式会社

定価はカバーに表示してあります。

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。
落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。
なお、この本についてのお問い合わせは文芸図書第一出版部あてにお願いいたします。

目次

私の結婚

8

「双子」ができたやつた

10

ランドセルが歩いてる

12

忘却の日々

14

「お父さんって変な人だね」

16

二人はふたり

18

優しくされたい

20

好き嫌いの考察

22

「奇跡の人」上演日記

24

かわいいユキヒコ

26

お母さんのキックは強いんだぞ

28

はてしなく遠いトイレ

30

お父さんの成績表

32

テレビゲームやらせてえ

34

サザエさんとジャンケン

36

「あどやどやおー」

38

お風呂の時間

40

兄弟ゲンカをやめさせる法

42

天然シャワー

44

引越します

46

子供のいない一日

48

宿題しろ！

50

長男の選択

52

「私のボクは左きき」

54

恐怖のCM

56

愛の言葉

58

映画が見たいよーっ！

60

オッパイの魔法

62

「オチンチンならまかせて」

64

実家でのーんびり

66

パブロフの双子犬

68

ボクたちの宝箱

70

お父さんはアンチ巨人

72

「お兄ちゃん」の主張

74

子供たちの服

76

ギックリ腰のバースデー

78

初めての出産

80

名前つけるのって大変

82

ハッピークリスマス

84

「あと一年」

86

お相撲さんと同じ食べ方

88

修学旅行の夜

90

こっちが寝込みたい

92

ヤクルトレディー

94

お父さんのチュー攻撃

96

長男の絵

98

かわいいウンチ

100

愛しのねんねこ

102

こだわりのお年頃

104

引っ越すと締め切りの敵

106

新しい家だ！

108

お仕置き部屋

110

目の上のタンコブ二つ

112

ボクたちの趣味

114

ボクたちの「トトロ」

116

お父さんはヒーロー？

118

タマにはこんな夜

120

二人はふたり 2

122

友の花嫁姿

124

怒りの大掃除

126

大っ嫌い！

128

「子供のケンカ」

130

男たちはトイレを汚す

132

お父さんの耳そうど

134

朝の光景

136

双子の兄貴分

138

長男の新築祝い

140

ユウヤのお言葉

142

怖いもの

144

お母さんの病氣

146

南の島へ

148

甘えて甘えて甘えられる人

150

お父さんのいない夜

152

おまけの夏休み

154

おまけの夏休み 2

156

お父さんの文章

158

「ブーブこわれたわん」

160

うちの庭

162

ユキヒコの世界	164
ケイスケの運動会	166
「モツの煮込み」	168
「マーちゃん」	170
夜遊び	172
お父さんのモツ煮込み	174
来年から保育園	176
夕暮れのひととき	178
気がつけば子供のたまり場	180
車の免許	182
双子の妊娠中	184
ボクのお金	186

子供の性別 ままならず	188
酔っぱらいお父さん	190
大地震だ!!	192
お金がスキ	194
ユウヤゴジラ	196
宇宙語	198
言葉はなくても	200
みんなでおトイレ	202
父と子の会話	204
もうすぐ入園	206
あとがき	208

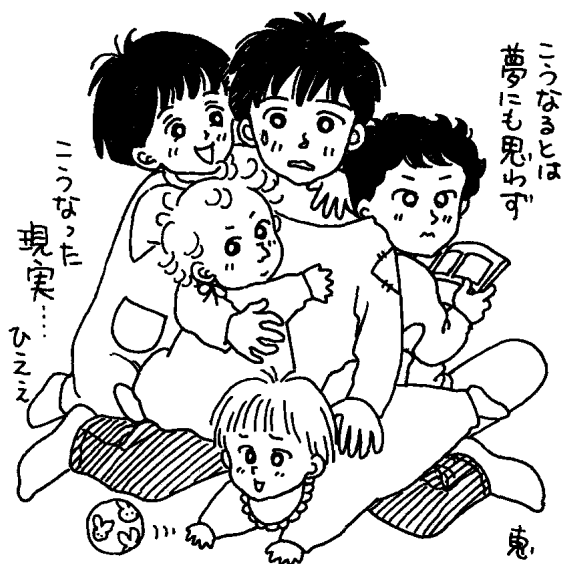
菊地信義

——
装幀・本文デザイン

おとこのこのこ

4人の息子と母の日記

私の結婚



私は結婚できないだろうと思っていた。

理由は数々あって、そんな事はどうでも良いのだけれど、さらに私の周囲の人間たちが私以上にそう思っていた事がショックだった。

母親は姉たちに、「恵子は一生結婚できないだろうから、あの子の老後はあんたたちが見てやるんだよ」と言っていたそうだし、占い師には「仕事運はいいけど男運が悪い」とか、「いわゆる普通の女の幸福は望んじゃいけない」とか、運勢見てもらう度に同じ事を言われた。結婚が決まった時、「あなただけは絶対結婚できないと思っていた」と言った友人は一人や二人じゃなかったし、ある友人は「ごく普通の青年を不幸にして、良心痛まない？後悔しない？」とまで言ってくれた。

「オレは子供のころから運が悪かったんだ」と、当の結婚相手である男は聞こえよがしなつぶやきを漏らした。また彼の職場の先輩は、

私との結婚を打ち明けた彼に対して「お前は勇氣があるなあ。ホントーつに勇氣があるよなあ」と、話していたそうである。彼は当時私が描いていた漫画雑誌の担当編集者で、先輩は、彼の前の私の担当だった。

彼らの話を総合するところなる。私は元来縁遠い女で、たまたま運の悪い男が私の魔手につかまり、不幸になるのは目に見えているのに、あえて結婚を選んだ男は、愛情の深さよりその勇氣が称賛される――。

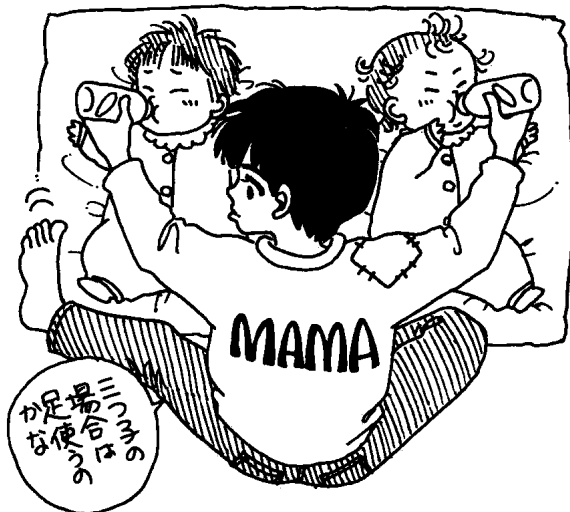
ひどい。でも彼らの言葉は確かに語られたのだ。母と友人と担当編集者という、私にとって最も身近な人たちの……。あつ忘れてた。姉はこう言つたのだ。「あんたね、あんたの事を好きになってくれる男が、本当にこの世の中にいると思う？」

私自身が感じていた結婚できない最大の理由は、極端に自閉的な性格ゆえと思つていたのだが、客観的には「そんなのしゃらくさい。チャンチャラおかしいぜ」というくらい、私という人間は、とんでもないらしかった。

「二年もつかないや、もつて半年」などとささやかれるなか結婚した私だが、ふつつつつ。とうとう今年の三月で、結婚十周年を迎えた。子供は四人も出来て家庭は円満だし、「あんたがねえ……四人も産むなんて信じられない」と言っている人たちもいるが、信じられなくても、現実にはそうなんだから仕方がない。確かに私は、家事の才能は全くないって自分でも認めているし、夫はいまだに「オレは運が悪い」って言っているけど。いいの。私が幸福だから。

「双子」が できちゃった

ふたごのミルクの飲ませ方



私には四人の子供がいる。それも全部男の子。そう話すと「女の子がほしくて頑張ったんだろ、やーい」と言われるだろうけど、うん、その通り！ でも言い訳させてもらえれば、三人目を作ったら、四人目も一緒に出来ちゃったのだ。つまり双子。

妊娠四カ月の検診の時、医者から双子だと聞かされた。病院からの帰り道は、足元がフワフワしてゴムの上を歩いてる感じだった（二人が四人になっちゃった。いきなり倍だつて。家族四人の標準世帯が子沢山の大家族になっちゃった。双子なんて……。母乳はどうやってあげたらいいの？ お風呂にいれる時はどうすればいいの？）頭の中でそんな言葉が渦を巻いている。

長男二男の赤ん坊時代の情景が思い出された。一日の大半は胸をはだけていたこと。片手で子供を抱きながら、掃除機をかけたり、

お風呂を洗ったこと。オンブしながら料理したり洗濯したこと。家の中をあっちからこっちに行っただけで、グワングワン泣きながらまとわりつかれて、一步も動けなかったこと。それが二人!!

家に帰ると、午後から出社すればよかった夫は、能天気なテレビゲームをやっていた。

私が「赤ちゃん、双子だって」というと、「えっ」と絶句したまま、テレビの画面と私の顔を何度も見比べた。

「じゃ……ベビーベッドは二ついるのかよ」夫の口からやつと出た言葉はそれだった。「学校に入る時は、机を二つ買ってランドセルも二つ買って、洋服買う時も二人分買って、おもちゃも同じのを二つ買わなきゃケンカになるのかよ」「そうよ!　ぜーんぶ二つ買うのよ。これからずーっと」そして夫はおそろおそろ言うのだった。「男の双子だったらどうしよう……」

生まれた双子が男の子だと聞かされた時、私は大笑いしたけれど、夫も大笑いした。夫や私の知り合いには、ほほえましくもバカバカしい話題をタダで提供してあげたし、おじいちゃんもおばあちゃんも、女の子を期待しつつも、一ぺんに孫が二人増えた事を素直に喜んでくれた。長男二男にいたっては、お祭り騒ぎだった。「女なんか嫌いだ。男がいい」と言っていた二人だから。病院のベッドの上で、四人の男の子が成長し家の中をウロウロする姿を思い浮かべてはため息をついていた私に、さらにため息をつかせたのは、入院費の請求書を受け取った時、案の定費用が二倍になっていた事だった。

ランドセルが 歩いている



我が家の二男は今年小学校に入学した。四年生になったお兄ちゃんの後を、早足で追いかけてながら、毎朝元気に通っている。

「学校に入ったら、ボク、お兄ちゃんの隣の席がいいな」とか「ともこ先生のクラスがいい」とか（ともこ先生は保育園の先生だつてば）、全く状況を把握できずにいたので、入学後にショックを受けないかしらと心配していた。でも「学校って、けっこう楽しいよ」との感想だったので、取りあえず安心していいのかな。もつとも、お兄ちゃんやその友達に、学校は楽しいかと聞くと「別に」「つまんねえ」って答えしか返ってこない。過剰な期待はするだけ損なんだけど。

新一年生の下校風景を見てるとおかしい。みんなブカブカの格好してる。うちの二男も、ブカブカの制帽に、手が全部かくれちゃう制服（これはお兄ちゃんのお下がり）。体の

三分の一はありそうなランドセル、でもうちの子は大きい方だからまだいい。お友達のアークンなんて、身長が一メートルちょっとしかないから、後ろから見ると「ランドセルに足がはえて歩いてるぞ状態」になっている。入学前にアークンのお母さんが「ランドセル背負わせたら、後ろにひっくり返っちゃったのよ。どうしようどうしよう」って騒いでいたわけ。みんなそろって同じ格好すると、どうしてもはみ出しちゃうヤツは出てくる。

息子たちの通う小学校で、一番背の高い子は百七十五センチだそう。でっかい体で、小さいランドセルを背負う姿は、ちよつと不気味だと思う。うちの長男は、四年生で百五十センチ近くあり、毎年十センチずつ伸びているから、六年生時には百七十センチ以上になることは確実だ。

入学式前の新聞紙上では、ランドセル反対論の投書がいくつか載っていた。私も反対論者になっちゃおうかなあ、なんて言う。「そんな見てくれだけのことで、軽々しい」とか言われちゃいそうだし、第一ランドセルの長い歴史を考えると、ランドセル製造で利益を得ている人たちは、いきなりランドセルがなくなっちゃったら、さぞかし困る事だろう。

でも、うちの場合、ランドセルはデイスカウントショップで半額で買えたし、学校までは歩いて三分だし、恵まれすぎた環境なんだよね。これが、デパートで五万も六万も出してランドセル買って、歩いて一時間かかる学校に通わせてたら、「ふざけんじゃねえ」って気分になるのかもしれない。

忘却の日々



最近の物忘れのひどさったら尋常じゃないのだ。元来ルーズな性格で、忘れんぼとしては開き直っていたつもりだったが、さすがにこうひどくては、日々罪悪感にさいなまれて生きている心地がしない。こうして、座りこんで原稿書いていても、何か忘れてるんじゃないかとドキドキしてくる。

こんなになっただのは、双子が動き回るようになってからだ。何をするにも、二つのおもりがついているので、頭の中は、足を一歩踏み出すにはどういう方法を用いればいいか、とか、双子の目をくらましてタンスを開け閉めするにはどうすればいいか、なんて、生活上最もシンプルなことでも、いっぱいになっている。社会的な問題なんて、入ってきやしない。銀行行くのは忘れるし、歯医者予約は忘れるし、子供会の当番はすっぱかすし、おばあちゃんから電話がかかってきて、「保育